

クラス	Q304	担当教員	江口 昇勇
テーマ	自己探求と事例検討		
著書・論文	スクール・カウンセラーの現状と展望 in aichi 愛知学院大学心理・教育相談室紀要 心理臨床 第6巻 2005 学校現場における高機能広汎性発達障害を巡る諸問題 愛知学院大学心身科学部紀要第2号増刊号 2007 軽度発達障害児がからむ危機介入の事例 愛知学院大学心理臨床・教育相談室紀要 第7・8合併号 2007		
研究課題等	1) 障害児を持つ親への子育て支援と対応困難な保護者との関係作り 2) 現代における親子関係の七パターンと子育ての過程で親として成熟すること 3) 障害者教育における影元型と障害者元型の内的意味 4) 障害者教育における自立と統合教育 以上、愛知学院心理臨床教育相談室紀要 2007 増刊号 2007		
ゼミナール概要			
キーワード：ドリームワーク、ボランティア体験、事例研究			
目的、内容、方法、授業計画等： ゼミの方針は気張らない、のんびり、かつ着実をモットーにする。大学に着任して4年、ようやくこの大学の雰囲気馴染んできて、私自身があまり無理せず、自己犠牲しないで、できる範囲の努力をすればそれでokと考えるようになった。あまり毒舌も吐かず、適度に甘い言葉を囁きながら、居心地の良い空間を作りたいと思う。従来の「苦しく、暗く、抑鬱的」な世界は現代では好まれないのであろう。自己探求深化のためには、鋭くゼミ生の内面に立ち入り、母子関係を始めとして家族病理をクリアーにし、生育史にまつわるトラウマ体験をえぐり出すことが避けて通れない関門であるが、それが時代遅れの遺物であることを認識するようになった。 ゼミでは＜体験重視＞の基本姿勢が一貫している。3年生では＜自分探し＝自己探求＞を目的にし、まずは様々なシミュレーションの場での自己紹介をする。次に感受性訓練を半期間、丁寧に行う。後期は自分史作成と同時並行で、家族力動の解明を円柱家族描画法(F-C-C-D)を通して実践する。そこで個人のコンプレックスが明確になれば球体アクティブ・イマジネーション体験を媒介にシンボルを深化させていく。その頃には、夢の採取もできるようになるので、夢分析やドリーム・ワークの手法も採用するようになるであろう。 ゼミの時間以外でも学生同士、話し合いを持つように勧めている。というのもゼミ生には施設等での定期的ボランティア体験を積極的に勧めており、不登校の子どもを対象にした適応指導教室、児童養護施設、知的・精神障害児・者施設、老人施設等々、どこでも構わないが、対人援助を実際にすることで臨床や福祉が自分に向いているかどうかを確認するチャンスとなるし、自分と直面できる貴重な場であるからだ。そして、そこで傷つく体験をするであろうから、ゼミ生同士の励まし、支え合い必要となるのである。			
担当教員からのメッセージ			
従来はともすれば自己探求にエネルギーを注いできたが、最近を対象研究にもエネルギーを注ぐことにしている。それは臨床心理学的な研究方法の修得が重視されると判断したからである。特に大学院進学を考えている学生は当初から、方法論の整った卒業論文執筆が重要性を持つことを認識させるよう指導している。具体的には各自がボランティアを体験している施設で自分が研究対象とする相手を定めて、毎回の出会いの記録を残して「事例研究」を行う。ゼミではそうした記録を元にグループスーパービジョンを行って、転移・逆転移を分析して、臨床の中枢を味わうのである。またそれ以外にも自分が関心を持つ事項、思春期やせ症、対人恐怖、自己愛病理に関する調査研究（因子分析からパス解析まで）や、臨床面接法による研究、カウンセリングなどの面接場面における転移・逆転移を扱う実験的研究など、自分なりの独自性を見いだして研究に取り組んでいただきたいと思います。大学時代は本格的に何かに取り組もうとすれば時間がどれほどあっても足りなくなるし、逆にボンヤリ過ごせばそれで終わる。どちらでも構わないと私は考えており、どちらを選ぶのも学生の自主性だと判断して、それを尊重している。もちろん、その責任も学生が負うことになるであろう。			